

# カント論理学の形式的分析

五十嵐涼介

京都大学文学研究科・日本学術振興会特別研究員

本提題の目的は、小山田(2012)が提示した枠組みを用いることで、カントの論理学に対し「概念」と「対象」の代数的構造に基づいた意味論を与えることである。

一般に、カントの論理学については（特に非専門家の間で）一般的に共有されていると思われる二つの見解がある。すなわち、(1)カントの論理学思想のうち、今日的な意味で論理学と呼べる部分（一般論理学）は本質的にはライプニッツ=ヴォルフ学派の学校論理学に他ならず、(2)カントが第一批判で提示した超越論的論理学は論理学ではなく、形而上学もしくは認識論である、というものである。本研究では、前述した意味論の構築を通して、カントの思想の内実はこれらの見解とは異なっていたことを明らかにする。

提題は以下のように進む。まず、カントの一般論理学を概念の代数的構造、および概念-対象間の指示関係についての一般的な理論として再構成し、種々の判断に対しての真理条件を与える。次に、学校論理学および超越論的論理学を、対象および指示関係に関してより特殊・具体的な条件を与えるものとして定式化する。最後に、学校論理学と超越論的論理学の差異がカントの哲学体系に対して持つ帰結を総合-分析判断の区別、およびアンチノミーの解決を中心としながら考察する。